湛睿の『注法界観釈文集』について

納富常天

『法界観門』はその成立や著者をめぐり、多くの問題点があるとされ、いろいろの学説が行われている。[1] しかし華厳の実践観法を説くものとして、『妄尽還源観』とともに華厳思想史上、さらにはひろく仏教思想史上、重要な文献であることはいうまでもない。したがってその注釈書類もすこぶる多い。[2]

金沢文庫資料中にも『華厳法界玄鏡』『注華厳法界観門』『華厳法界観門智燈疏并序』『注華厳法界観務本記』『華厳注法界観門序科文』『注法界観釈文集』などがある。[3] いずれも金沢称名寺（横浜市）第三世湛睿の関係資料で、湛睿が『法界観門』を如何に重視していたかがわかる。なかでも『華厳注法界観門序科文』と『注法界観釈文集』は、ともに湛睿が著わしたもので、『法界観門』研究の上から重要である。

『華厳注法界観門序科文』一巻一帖は、宗密の『注華厳法界観門』に対する裴休の序の科文であり、湛睿が延慶三年（一三一〇）、宗豫の『注華厳法界観科』を参照して著わしたものであるが、[4]『注法界観釈文集』は題号からもわかるように、宗密の『注華厳法界観門』に対する注釈である。日本における『法界観門』の注釈書としては、管見するかぎり、わずかに「天正十年三月十一日」の識語をもち、宗密の『注華厳法界観門』の巻首の部分―周遍含容第三　事事無礙法門（大正四五・六八四・下）まで―を注釈した、撰者未詳の『注法界観鈔』（東大寺図書館蔵）が知られるのみであるから、断簡ではあるが、湛睿の『注法界観釈文集』は華厳学研究史の上から重要な資料としなければならない。そこで、ここでは紙数の関係などもあり、とりあえず本文を紹介するとともに、専門的な研究の手がかりとして、その成立などについて簡単な解説を付しておきたい。

湛睿（一二七一―一三四六）が生涯に著わした華厳学関係の著書は、大小あわせて四十部以上が知られている。[5] このなか

には華厳学の問題点をとりあげ解明したものもあるが、南都教学、とくに凝然の学風を継承し、学術的に重要である祖師の撰述に対する注釈書―『華厳経探玄記疏抄類聚』『五教章纂釈』『華厳演義鈔纂釈』『起信論義記教理鈔』など―が多く含まれている。

『注法界観釈文集』については、すでに大屋徳城氏が「金沢称名寺三世本如房湛睿―金沢文庫新出の史料に拠る事蹟並に学風の研究―」において、ひろく湛睿の撰述・鈔録・手沢・文書などにわたり列挙しているが、(6)そのうち金沢文庫再興（昭和五年）以前に知られていた事蹟として、つぎのような記録を紹介している。重要であるから全文を掲げる。

高野山の霊雄房祥道といふ人が、南都に留学した時の覚書（天保十三年記）の中に、註法界観釈文集四巻を見た事を記し、斯書は湛睿が正和甲寅の年泉州久米多寺で、禅爾の講演を聴き、建武五年七月、下総国千田庄東禅寺で、先師の口決に任せて起稿し、暦應二年十月、金澤稱名寺で修正を加へ、同四年四月、鎌倉泉谷浄光（明脱か）寺華蔵院に於いて、再び潤色したもので、澄観の玄鏡、宗密の注、宋紹元の疏並に本嵩の通玄記三巻、宗豫の本記一巻に就いて、類集したもので、七十一歳の時の著であるといって、その奥書を載せて居る。

註法界観門釋文集（湛睿）　在北林院　四巻　奥云、此愚鈔者、去正和甲寅之暦、於泉州久米多寺、聽禅爾大徳講演、其後建武五年七月十日、於下総国千田庄橋（マ、土橋カ）東東禅寺、任先師口授草創之、暦應二年十月十二日、於武州金澤稱名寺修飭之、同四年四月十六日、於鎌倉泉谷浄光（マ、明脱カ）寺華蔵院潤色之、然今前序云、釋文有數家之疏云々今現行唯有三家、謂清涼玄鏡、圭峯注、及皇宋紹興府光寺沙門釋紹元造智燈疏一巻也、又就此經釋有二家、東京呉門山釋廣智大師本嵩造通玄記三巻、平江府普慈寺釋宗豫造本記一巻也、即類集此等疏記之、解釋兼据集經論章疏之要文、故云釋文集、是併為積普法見聞之薫習、助初心晩學之閲覧也、於戯時既却（劫カ）末、處亦邊地、圓宗之紹隆、我等之依學罕曇華之句、遇於亀（マ、盲脱カ）之喩、懇志之至、佛祖加護念（マ、已カ）而耳

華厳宗末資湛睿（通夏四十六　俗齢七十一）

斯書は既に佚して、今所在を知らぬ。湛睿の参考した紹元の智燈疏一帖は現に金沢文庫に蔵して、書皮に湛睿の二字が残って居る。

これによると正和三年（一三一四）、泉州久米多寺（大阪府岸和田市）において、凝然の弟子で、東大寺円照から「俊爽叡敏、義解縦横」と評され、多くの学徒を教育して法幢を高く掲げた禅爾の講義を聴聞し、それから二十五年も経過した建武五年（一三三八）、その講義をもとに下総東禅寺（千葉県多胡町）で著わしていることは注目しなければならない。またそれ以後の著書としては、『起信決疑抄』『華厳信解安心要文集』『随自意抄』『古題加愚抄』『初心成覚文集』があるが、いずれも華厳学の問題点をとりあげ解明したものばかりであるから、注釈関係としては最後のものであり、もっとも円熟した

ものといわなければならない。そのうえ、称名寺や浄光明寺で、再度にわたり修正を加えているから、委曲をつくしたものということができよう。

また書名を『注法界観釈文集』としたのは、澄観『華厳法界玄鏡』、宗密『注華厳法界観門』、紹元『華厳法界観門智燈疏』、本嵩『法界観通玄記』、宗豫『注華厳法界観務本記』をはじめ、経論章疏の要文を類聚・捃集し、あわせて自己の解釈も加えたからとしている。

また大屋徳城氏はすでに佚亡しているとしているが、永年にわたる金沢文庫資料の整理や調査の間に、古文書の紙背や、『戒本見聞集』『華厳見聞集』として整理されているもののなかから、全巻の四分の一、乃至五分の一程度と思われる湛睿草稿本の断簡三十一紙を発見することができた。周遍含容観の部分が一紙のみであることは非常に残念であるが、真空観の後半部（二十二紙）と、理事無礙観の後半部（八紙）を中心に残存している。これらの断簡から巻子装であったことがわかるとともに、注釈は逐語的で、随所に問答を設け、澄観・宗密・紹元・本嵩・宗豫の注釈書をはじめ、経論章疏としては、『華厳演義鈔』『華厳経疏』『円覚略抄』『円覚大抄』『華厳経普賢行願品別行疏』『華厳経談玄決択』『華厳還源観疏抄補解』『成唯識論』『起信論疏』『大智度論』『倶舎論頌疏』『仁王経疏』などを盛んに引用していることがわかる。

最後に久米多寺や禅爾については、拙稿「泉州久米多寺について」[7]にゆずるが、撰述を行った東大寺教学の一拠点東禅寺については、あまり知られていないので、簡単に触れておきたい。土橋山東禅寺は室町時代と思われる七基の五輪塔が現存しているので、その繁栄が推察されるが、元禄九年（一六九六）定済時代に再鋳した梵鐘銘[8]は、貞享頃、一山悉く焼失したことを伝えている。しかし正徳二年（一七一二）法印慶□銘の石幢、宝暦六年（一七五六）浄性銘の「（梵字）都率内院第四十九擬常行律儀院土橋東禅寺」の石碑などは、江戸時代の宗教活動の一端を物語るものであり、現在はわずかに小さな本堂が一宇残っているのみである。東禅寺の開創の時期は明らかでないが、鎌倉時代末期には、千葉氏の一族千田氏の氏寺として、また鼻和・次浦・井土山などの在地豪族とも密接な関係を結び、顕著な宗教活動がみられた。とくに正中二年（一三二五）頃、湛睿が長老に就任してからは、後掲の年表からもわかるように、学山としての教学活動も非常に活潑であった。

しかし元弘三年（一三三三）北条氏の滅亡、さらには建武二年（一三三五）秋から翌三年におよぶ、千田庄を舞台にした千葉介貞胤と千葉大隅守胤貞の抗争は、東禅寺をして動乱の渦にまきこまずにはいなかった。湛睿にとって最大の外護者であった金沢北条氏の滅亡、次浦・井土山など在地の有力武士の死没は、東禅寺にとっては危急存亡にかかるものだった。

その間の動向は、つぎに掲げる史料から伺い知ることができる。

(1)業疏疎決第一奥書(9)

（前略）建武二年乙亥下総州千田庄土橋東禅寺、以業疏當巻充年始開講、然世上轉変之後、三四年以来都鄙不静謐、道俗尚多危、就中當寺現住□□在縁之仁有数輩故、守護使乱入被召取了、雖猥雑無極而難黙止故、始自正月十七日終于二月七日、首尾廿日方談之訖、世法佛法悉以廃滅、何日何時更欲再興、悲哉嗚呼、終南末資貧道小比丘湛睿法蘭四十夏俗齢六十五

(2)湛睿書状(10)

（前略）土橋東禅寺本領、悉令相違候、不断失食候間、僧衆難止住、多分令退散候、恒例之布薩難相續、又談義興法令闕如候、佛殿僧坊已下悉雖破損候、不能修複候間、可有御賢察候（後略）

(3)等空書状(11)

（前欠）寄候て、少々人打せ、手おほはせて、引返候、其日諸方節合にて候か、皆千葉方打負候、當庄為躰、天地動程事候、若今度寺までも寄付候はゝ、なにも残候はしと覺候、偏仰佛神力候、盡祈禱精誠候（後略）

このような動乱の中で、湛睿は多くの難関を克服しながら寺院経営に努めるとともに、『起信論義記教理鈔』『業疏疎決』『五教章纂釈』の講義を開いている。

ただ建武元年と二年には、ともに四月から十月まで、およそ半年の間、金沢称名寺に出向し、『五教章纂釈』と『華厳演義鈔纂釈』の講義を行っているから、一時世情は安定したものと思われる。しかし千田庄における内乱以降は、わずかに建武四年六月、三谷永興寺（茂原市）での法事を除き、ひたすら寺運の回復と隆昌につとめ、東禅寺の経営に専念するとともに、教学活動においても『華厳経旨帰見聞集』の講義、『四分律行事鈔見聞集』『注法界観釈文集』の撰述を行っている。そして暦応二年（一三三九）二月、観本母の三十三年忌仏事を最後に、湛睿は金沢称名寺の住持として出世したが、その後も東禅寺との関係が続いていることは注目しなければならない。いま金沢文庫資料により東禅寺略年表を掲げると、つぎのとおりである。

東禅寺略年表

西暦	年月日	事項
一三〇一	正安三年四月十五日	静然、榮真から両部傳法灌頂うく
一三一五	正和四年十月九日	誓弘、秘色抄第一書写
	十二月六日	誓弘、秘色抄第五書写
一三二六	嘉暦元年七月以前	湛睿、長老となる
	七月二十日	湛睿、戒円房融範の法事つとむ
	八月十日	湛睿、某（戒円房か）六七日法事つとむ
	十二月三十日	湛睿、布薩会つとむ

一三二八	三年二月廿四日	湛睿、四分律行事鈔見聞集（戒一五八）講義
	十二月十五日	湛睿、布薩会つとむ
一三二九	四年二月十五日	湛睿、布薩会つとむ
	二月二十日	湛睿、彼岸会つとむ
一三三〇	元徳二年二月十五日	湛睿、布薩会つとむ
一三三一	三年一月十五日	湛睿、布薩会（年始説戒）つとむ
	一月二十日	湛睿、四分律行事鈔見聞集（戒一四三）潤色
	一月廿九日	湛睿、四分律行事鈔見聞集（戒一三六）再潤色
	二月　四日	湛睿、四分律行事鈔見聞集（戒五五）抄出
	三月　十日	湛睿、四分律行事鈔見聞集（戒一三八）再潤色
	三月十二日	湛睿、四分律行事鈔見聞集（戒一三七）再潤色
	十二月一日 廿五日	湛睿、四分律行事鈔見聞集（戒一五一）再潤色
一三三二	元弘二年一月十五日	湛睿、布薩会（年始説戒）つとむ
	三月廿四日	湛睿、第三法習事書寫
	三月廿八日	湛睿、故坊主七年忌法事つとむ
	十一月十一日	湛睿、惣逆修法事つとむ
	十一月十八日	湛睿、鼻和五郎四十九日法事つとむ
	十二月廿四日	湛睿、鼻和五郎百日引上法事つとむ
一三三三	三年一月十五日	湛睿、布薩会（年始説戒）つとむ
	二月十五日	湛睿、涅槃会つとむ
	八月十一日	湛睿、孫六殿百日法事つとむ
	八月三十日	湛睿、次浦殿百日法事つとむ
	九月　五日	湛睿、井土山入道百日法事つとむ
	九月廿九日	湛睿、鼻和五郎一周忌法事つとむ
	十月十五日	湛睿、御局逆修法事つとむ
	十月十八日	湛睿、惣逆修法事つとむ
	十二月廿八日	湛睿、御夕逆修法事つとむ
一三三四	四年一月十五日	湛睿、布薩会（年始説戒）つとむ
	一月　廿日	湛睿、起信論義記教理鈔講義
	三月十五日	湛睿、布薩会（年始説戒）つとむ
一三三五	建武二年一月十五日	湛睿、業疏疎決講義
	一月十七日	湛睿、災亡人々三年忌法事つとむ
	二月　七日	湛睿、起信論義記教理鈔講義潤色
	二月廿五日	湛睿、華厳五教章纂釈再講義はじむ
	三月　十日	
	潤十月八日	

一三三六	三年一月十五日		湛睿、布薩会（年始説戒）つとむ
	四月十二日		湛睿、華厳五教章纂釈再講義おわる
	八月十五日		湛睿、布薩会・輪如房乳母法事つとむ
	八月廿三日		湛睿、原四郎母四十九日法事つとむ
	十一月廿五日		湛睿、四分律行事鈔見聞集抄出
一三三七	四年二月廿三日		湛睿、華厳経旨帰見聞集講義
	三月四日		
	五月廿六日		湛睿、サ、入道五旬法事つとむ
	十二月十五日		湛睿、布薩会つとむ
一三三八	五年一月十五日		湛睿、布薩会（年始説戒）つとむ
	七月十日		湛睿、注法界観釈文集撰
	閏七月十日		乗均、華厳演義鈔纂釈書寫
	閏七月廿九日		
一三三九	暦應二年二月五日		湛睿、観本母三十三年忌法事つとむ
一三四一	四年十一月四日		湛睿、了親一周忌引上法事つとむ
	十一月五日		湛睿、某逆修法事つとむ
一三六〇	延元五年	——	高尊、慧俊に持戒清浄印明授く

（1）吉津宜英氏「澄観の華厳教学と杜順の法界観門」（駒沢大学仏教学部研究紀要三十八号）参照。

（2）『義天録』、木村清孝氏『初期中国華厳思想の研究』、鎌田茂雄氏『華厳学研究資料集成』参照。

（3）『華厳法界玄鏡』『注華厳法界観務本記』は尊経閣文庫現蔵。『注華厳法界観門』は覆宋版であるが、わずかに一紙が残存している。

（4）弁如手沢本。「延慶三年庚戌五月九日、於武州金沢称名寺科勒也、深探豫師之雅意、兼参愚昧之短才、定多紕謬、追可糺正矣、花厳宗末資湛睿通三五俗五八」「于時暦応五年四月十二日、於金沢寺西二室、書寫之了、花厳末学通識俗年廿三」の奥書がある。

（5）湛睿については拙著『金沢文庫資料の研究』参照。

（6）「大谷学報」第十五巻第一・三・四号参照。

（7）金沢文庫研究紀要第七号参照。

（8）荻野三七彦氏「称名寺と東禅寺」（金沢文庫研究十八号）参照。

（9）金沢文庫古文書識語篇二一三号参照。

（10）金沢文庫古文書一八九五号参照。

（11）金沢文庫古文書一九九七号参照。

凡例

一断簡は『注華厳法界観門』に順じて配列し、便宜的に番号を付した。ただし(10)(11)(31)は推定にまかせた。

一虫損等により不明の部分は、その字数に応じて□□、または「　」で示した。

一異体字等は可能なかぎり原文どおりにした。

一訓点等は原則として原文の表記どおりにした。

断簡 (2)

一筆者が私に校訂した部分は（ ）を付し傍注した。
一末尾に各断簡の当該する『注華厳法界観門』（大正新修大蔵経第四十五巻）の頁・段・行と、断簡の所在を示した。

(1)

問上惣尺初門四句ニ中云一簡断空□簡実色ニ三雙簡云〻然今如料簡者唯簡実色ニ見タリ如何答一義云今正雙簡也謂初標中上句簡実色ニ下句簡断空ニ次尺中如次ニ尺成謂初以空中無色等者簡実色也後會色ニ無躰等者簡断空也故玄鏡云初標次尺〻中先雙揀即離ニ以空中無色故色不即空ニ以離色無躰故空不離色不即不□(離)方為眞空已上准此應知一義云案注家意ニ唯簡実色ニ歟謂□観門尺与結ニ中無色之色會色之色 並是実□(色か)也又帰空之空空中之空同亦眞空也此外更不見有 所簡之断空ニ故務本記云然前云此門雙揀 断実ニ今唯論実色ニ者以衆生執色ニ之情偏重ニ故此則為人ニ深有意也引於心経及佛頂経ニ證眞空更無 色等也已上

観以空中無色文意云眞空中無実色ニ故実色不即眞空為言此尺上句也問若尒眞空中可有如幻影像之色ニ哉

(2)

答円覚大抄尺此義ニ云本來但是真空非下謂有□影之色可中説是真空上也若有幻影之色ニ雖非空躰質礙ニ且還有長短分限ニ如下鏡中見青處ニ不偏於黄ニ二寸短影不得云丈尺長影上文等如務本具引意云縦雖幻影色ニ而若太即為空ニ者亦可有分限ニ故為言

問若尒今観門雙簡二色歟如何答

観良由會色歸空文自下結成中初結所尺後是故下結所標ニ應知

問結所尺ニ者其義如何答玄鏡云三良由下結成上義ニ以下即空ニ

結上不即空ニ特由會色ニ為空ニ安空中有色已上案云此玄鏡意

會色歸空者結上會色無躰等ニ空中必無色者結上以空

中無色等ニ也然所以空中無色ニ者實ニ由會色ニ無躰ニ故得尒ニ也

仍自相下當以尺中下文ニ結中尺中上文上故今結中云由會色歸

空等ニ也又観門ニ云是故由色空ニ下結成標名ニ而玄鏡略不尺之ニ

務本記ニ先具引□後以注家意ニ更尺云今注於結標ニ中ニ〇上句

結標中下句ニ〻〻結標中上句也已上

観以法簡情訖文此者所執之妄境也意云妄情不自起ニ必託妄境ニ

生故今簡下所執之断空實色妄境本無上以令悟法空ニ則情執自

亡故云以法□□也一義云通玄云以法者〇此用幻色即不即

法ニ則□□断空實色之　計訖已上

観四色即是空文上三句簡　断空實色之情ニ既窮　則真空□顕故

云色即是空ニ也今標云即ニ者不實之義故尺云不實真空也更ニ

尺不實之所以ニ云以諸色法必無性故ニ仍注尺無性所以ニ従縁

有故也

観是故色即是空文自下結成也此但結標名ニ也

注空非色相文自下會三性ニ也意為結顕　依他無性即是円成之

真空理上也

(3)

注古人云色去不留空文問今引古人ニ有何意ニ哉答務本但云文皆

可見ニ然玄鏡惣尺初門四句ニ中云二揀乱意〇取色外空第三句

揀之已上仍今次上ニ尺第三句ニ中云二揀乱意〇會色無躰故説即

空ニ豈於色外ニ有空ニ對　色ニ古人云色去不留空ニ〻非有邊住ニ

也已上但今注於第四句下ニ引之ニ私案□色即空故色去也既即

色ニ明空故不存空相ニ云不留空ニ若於色外ニ有空ニ則空對色ニ

住是可云有邊住ニ而今不尒ニ故云非有等ニ也

一義云通玄記擧両師異説竟即下云若直就観ニ解　多去　即會

色帰空不留空者明空即色空非有邊住者即後ニ観雙存互泯皆

無碍等文

観如色空既尒文上来正尺當句眞空之義ニ自下結例諸法ニ

(4)

観三空不即色〇空是所依文今云空者是隨縁眞如也抄八下云以

空義故説於隨縁等文具如下引　務本云円覺大抄云謂眞空隨縁現色〻

依空ニ故名空□□□□依故不即色已上問初三句簡情云〻尒者

當句簡何情哉答一義云今尺中云空是所依等者簡實色也故務

本尺注ニ中云如鏡下喩　顕意云鏡明必非是影ニ喩於所依之空

必非能依之色ニ此揀實色ニ除太即之過已上必与能依作所依等

者簡断空也故務本正尺此文ニ云円覺大抄

(5)

云又非下別有色自躰ニ来向空中ニ而現上但是眞空全躰而現故即

色〇此揀断空ニ除太離之過已上意云眞空即チ(色か)□故揀断空ニ也問

起信疏尺四該中以外物喩遍計□(之か)□法以鏡中影喩心内之幻色今何以影喩實色哉答凡用喩者為顕今法義故隨時不可一定歟

一義云円覺略抄四下云次明空即色中揀情二三者一揀断空○二揀實色○三揀影像云空是所依不即色□□所依即也等文今注亦擧影喩明知圭峯意今第三句但簡影像不簡断空實色也問若尒

□(注)如鏡之明無影像故文自下此初二句躡上句所用之喩也次云方能与影像下正擧當句所用之喩也

注故不即是影文此文誤也可除不字凡今註尺下句中有法喩初云無色故等者法也次如鏡下喩也喩中初尺必与能依等二句也次今云故不即是影者躡上喩意以尺故即是色也一句何云不即是影哉明知可除不字也既与影像作所□(依か)以能所不二故影處必有明尒者可云明即是影□喩空即是色之義也務本云即是影者有本云故不即是影□誤已上一義云不字可作明字歟

注是空中無色文今注至　文理俱絶者全是玄鏡文也有理者下云注家揲尺之也務本尺云寄喩示理之有無約聖教示文之有無已上又玄鏡自尺其所以云以下空中無　色由事即理〻絶相故色必有空無空之色非實故〻不反上別就能所依以尺其義已上問今云色中無空文理俱絶者心経疏尺如何會通哉答務本云有引心経疏為妨者彼云一相違義下文云空中無色等以空□(害)色故□(准)此應云色中無空以色違空故若以互存必互亡故既

(6)

□□以互存必互亡□□是□□□翻□□□□(顕か)(存か)□(豈か)□是聖教一向説色中無空耶已上既□(示)若以等下記主□(會か)通也思之

観四空即是色文務本云観法無我理者即諸法無性之眞理已上問此法無我無性之眞理者不變隨縁中何眞理哉答下注云眞如不守自性云〻思之問若尒何上注正尺眞空躰云二空所顕之眞如哉演義抄三下尺五教理中云生空所顕是小乗教理二空所顕是始教理無性眞如是終教理等文唯識第八尺頌云円成實於彼常遠離前性之文云二空所顕□□(円滿)成就諸法實性名円成實○性　顕二空非　円成

(7)

観以是法無我理故文此有二因一於因縁所生諸法上自備無性義即是無我理　故此無我理定非事外也二事依理立以能依所依是不離故離事躰外而理無自躰故眞理非事外也此約不離歟□□(務本)但虚無躰故者玄鏡云理虚無躰全将事法本

(8)

唯識論文正述此意也若法性意由二性相即故於依他上空能執之我法則依他亦空〻即眞如故云二空即眞如也抄八下云然法相宗亦非即離多成不即等文繁故不引

観非断滅故文玄鏡全不尺之略抄四下云非断滅者二意一以色非

自躰之色一但是眞空之色一故不断滅二以眞空不守自性一故雖不變一故能即色云非断滅也已上故能之故字大抄作而字一餘全同之二意中初意者色若自躰之色者以可破壊無當法一故可断滅一而是眞空之色故不断滅一仍眞空必不異色一也為言後意者眞如若唯不變凝然者無隨緣作諸法一之用故眞如之妙用應是断滅一今既隨緣作諸法一故非断滅為言今注但知後意一也務本云観以是法無我理非断滅一為因一顕空不異色之宗一注以眞如不守自性一隨緣作法一即非断滅一知因一円覚大抄云非断滅者有二意○全同略抄今欲專於観旨一唯存後義也已上

観第三空色無閡（礙）観文問下惣断簡四句十門一中云第三句一門解終趣行已上其意如何答円覚略抄二下云第八修證門○七門皆論佛之言教一〻詮於義一約教一解義一但是聞惠之境設依義一観察思惟亦唯思惠之境皆未是忘緣一寂照一若上云根智即言一忘言一即相忘相一此不復論一今為中下之流一須下開忘機寂志之方便發惠契證之玄門上已上准此一

(9)

注以色是虚名文自下尺唯帰於空之所以一初正尺所以一有二所以一應知次文中下引示證據一初指文為證一後是故下指観名一以結顕也

(10)

案云且如般若等經説空観一云中色即是空等上者非是色滅色外等之空一故今明眞空観一中先立二句八門一揀情一顕解一者正是論彼經教之言義一令下學人一依教一解中知所説空義上令心決定一即是聞惠之分斉也然後專依所解之義一深得法味一愛樂観察數〻思惟所生之惠是名思惠一即今第三句解終趣行一者是也花

(11)

方便観与正観一之安心上就方便観一香象作兩尺一如初門中具引一可見之又顕密円通成佛心要明眞空絶相観之安心一有三門云〻具如上引一但於唯識論加行位頌一者法相宗意以智是有為唯修生故云尒也然法性宗意本有恒沙性功徳中本來具足信解行願等一故若今有人修起則依本信徳一尚起信心一依本解徳一而起解心一乃至三學六度並皆依本一起修一〻修起皆帯本有一故知縦雖

(12)

観謂色擧躰文此段一有多実本一且玄鏡所揲本一云色擧躰不異空一全是盡色之空即色不盡空現空擧躰不異色全是盡空之色等文對今注所揲一可見之一又玄鏡云全是盡色之空者有本一無盡色之三字一但云全是空故一耳而尺義亦通等文

問今云盡色盡空等一其義如何答玄鏡云空有各有二義一空二義者謂空非空有二義者謂有非有空中言空一者以空必盡有一故言非空一者亦無空相一故又不尋有一故有中言有一者有必盡空一故非有者有相離故又不尋空一故今明色空無尋一中初明色不尋空一取空上盡色之義一次明空不尋色一取色上盡空之

義ニ其ノ不相導ハ即是レ擧躰全是之義ナリ其離空有相ノ義ハ在第四泯絶門中已上此以空有之各二義ヲ配尺シ當段之文言ニ又指示第四門其義尤至要也留意應思務本引用

(13)

此全文

観則色盡而空現文問上標無導ノ所以ヲ云盡色ト之盡ト与下下ニ出無導ノ相ニ色盡ト之盡ト其義ノ為同ニ為異ニ答通玄云盡色之空者謂無色不空也窮盡衆色之躰ニ無性本空故ナリ言色盡而空現者幻色亡而眞空顕也上句盡字ハ是窮極ノ義下句盡字ハ亡泯義雖言色盡ニ非滅壞也色本無故已上

問若尒次下云全盡空之色ト者此盡之字義如何答

(14)

注謂若色是實色文自下躡前ニ成今ヲ也謂ク實色断空即是迷情之妄法故互相障導今既由下前二句各有四門中各前ノ三門揀フニ情ヲ上故已ニ離断實各後ノ一門顕理ニ故已ニ成眞空幻色ヲ是故今雙擧ヲ互ニ令無導ナラ即成此第三句故具挙之ニ令メテ同時ニ相應セ以成正解ニ也務本記意又智燈疏尺第四句不拂第三句ニ之所以ヲ如次下引可見之ニ

注有本云色不盡文玄鏡云以色不導空ニ故色不盡ニ也即是盡色之空故而空現也已上

観第四泯絶無寄観文問玄鏡ニ以テ空有ノ各ノ離相之義ヲ指配當句ニ又観門ニ正尺泯絶之所以ヲ云以生心動念即乖法躰已上然唯識論第九尺下加行位頌ニ云現前立少物謂是唯識性以有所得故非實住唯識ト之文ヲ上云以彼空有二相未除帯相観心有所得故非實安住眞唯識理等文加行位ノ并猶以ヲ如是ニ何況ヤ當今始學ノ凡人自非五位ノ無心ニ者心ノ起コトスル必託境ニ生争得下泯絶空有ノ二相ヲ頓ニ契コト中行境上ニ哉答今観門意依前ノ三句九門ニ以テ聞思ノ二惠ニ令観中想セテ空有ノ二相互奪無導ニ本來離相之妙旨ヲ上如是ニ練習漸次ニ功積ニ方ニ得下情識泯絶眞智開發スルコト上者豈不契行境ニ哉准テ下前ノ所引ノ円覺略抄ノ二下尺スルニ修證門ノ來意ヲ可思之ニ又起信論解尺分就眞如門ニ正問答ノ尺成

(15)

観謂此所観眞空文務本云初拂第二門ニ○以空非ルヲ空ニ無キコトシ可即色ニ不ルセ即色ニ又理本絶言ニ故約観即心ニ冥眞極ニ故方成妙色観已上前尺第三句ヲ中ニ以空有ノ各ノ二義ノ中ニ離相義ヲ指示此ノ第四句ヲ故今尺當文ニ亦以離相ノ義ニ尺成之ヲ也但云約観即心者

観亦不可言即空文務本云拂第一観ニ○以色亦即非ルヲ色ニ無可コト言即空シニ不スト即空ニ故即事同理ニ故理本絶言故心冥眞極無心即故方成即空観尒已上

(16)

観不可亦不可文抄一上云有所得故如鳥履沙若無所得當句即絶已上今重ヘ拂トモ迹ニ而若有所得並是如鳥履沙ニ若無所得當句即絶

注不可智ヲモテ知ニ也文問上既云般若現前ニ今何云不可智知ニ哉答上云般若者眞空妙惠即下ニ云行境ト者是也今云智知ト者解了之

智也凡般若現前之行境者行願疏云無分別智證理法界以為五門○第一能所歴然者以無分別智證無差別理一○如日合空雖不可分而日光非空一〻非日光一第二能所無二者以知一一切法即心自性一以即躰之智一還照心躰一擧一全収○如一明珠〻自有光還照珠一矣第三能所俱泯者由智即理一故智非智一○由理即智一故理非理一○第四存泯無導○第五擧一全収等文同記第二云一能所歴然者則法相宗一證道謂大乘始教也○第二能所無二者則法性宗一證道謂大乘終教也○第三能所俱泯者即大乘頓教中證道也泯有二意一一互奪故具如疏文二本心頓現故俱泯謂本覺心躰自知不可将知一更知心躰一以照躰独立一故如眼不自見一如刀不自斫一等故祖師云擬心一即差正證之時無別能證一〻既無即是本心所證無得亦唯本心故能所本絶般若心經云無智亦無得等文今云

□□(経か)無寄者當第三門歟(17)

観是謂行境文大疏一上義理分斉周遍含容尺十玄門第二廣狭一中云或唯廣無際或分斉歴然或即廣即狭或廣狭俱泯或具前四一以是解境故或絶前五以是行境故下皆准此上已抄三下云初事如理一故廣不壊本相一故狭此二同時故有即廣即狭一同時互奪故有俱泯一五具前四二時照了故云解境一行起解絶故有第六一惣絶前五一誰復以廣狭存泯一當其方寸一上已又同疏一尺縁起相由十門第六躰用雙融義一中云五合前四句一同一縁起無導俱存六泯前五句一絶待離言冥同性海上已決擇第六云冥同性海者謂前五句属因分一有迹可説故第六句属果分一絶待離言故上已

問俱舎論百法論等明五蘊攝諸法一中並以造作遷流二義一尺行字一廣攝有為之法□然今行境之行字其義如何答未見祖師先徳之解尺一且如大疏六上請分法深難受止中尺経偈云菩薩行地事一之文一云菩薩行者是出世間智謂即是證道證心渉境故名為行上已既云渉境一明知行者履渉遊履之義也尒者今亦可准知一

注有二境文行願疏尺経名題中云境界有二一分斉境如國彊域各有分斉佛及普賢□□(徳開)分斉無能及故二所知境事理無邊唯佛普賢方究盡故由證所知無邊之境故上已今初是所知境亦名所縁境一後是分斉境如文一應知一問云泯絶無寄観之行境一者能所俱泯冥同性海一有何所縁一今云行之境一哉既一云之一境必可有能所一是依主尺故如何答一義云務本云所到之境唯一眞空但以下約事行到行与境一殊上乃名之境一若約理行到一行与境一一名行即境一今与境冥者心智与理境一冥合方是眞空冥心遺智者既心与理一冥合即唯理而無心一智亦遺忘乃非解智所及

故云唯行等也上已意云行一有事理一事行必有能所一約此事行一故云之境一然今理行与境一冥忘心一遺智一故其實可名行即境一為言一義云解了智未忘分別一故有能所一行證智悉忘分別一故絶能所一今為簡解之境一故云行之境一即下結非解境故一者即此意也例如下小乘云中所相之有為法与能相之四相一必躰各別上唯

(18)

識論第二擧小乘所執之證據ニ云如契経説ニ有三有為之有為相ニ上已立量ニ云之有為相言別有躰ニ有第六轉ニ故如天授之衣云〻此因有不定失ニ以大乘四相与色心等ニ非一非異故云〻同論次下云非下第六聲便表中異躰上色心之躰即色心故等文准此ニ可知ニ故玄鏡云言是行境者○然有二意一一者上是行家之境今心与境ニ冥智与神ニ會亡言ニ虚懐冥心ニ遺智ニ方詣玆境ニ明唯行能到非解境故二者即上心智契合即是眞行〻即是境行分斉故已上既云行家之境ニ明知簡解家之境見タリ

注眞空理性文自下對下前二句八門簡情ニ顕解上以顕下今第四句眞空本然不可存中新生之解數上也於中ニ初擧理自本明ニ也次但以下約人迷執ニ故須揀情ニ顕理ニ也後今情忘下正明當句意ニ譬如下病差藥亡与未病ニ時本身ニ全無中少異上故云今情亡智泯等ニ也然病除已若更服藥ニ即傷本身ニ故云若有解數即為動念等ニ也務本記意

(19)

観初二句八門皆簡情文問前注云前三顕情後一顕理文今何云顕解ニ哉答通玄云簡情顕解者然前注云後一顕理ニ不及顕解ニ弁観心故上已□

観第三一句解終趣行文問上云簡情顕解ニ之解与今云解終趣行ニ之解ニ為同ニ為異ニ答前第三句之處引円覚略抄二下ニ等委抄之ニ了何更疑哉又通玄云解終趣行者無分別正行也然則解亦般若之行且約二句ニ観空ニ未知有ニ照有ニ即違空ニ初習未円ニ但名解第三句空有斉照方ニ明趣無分別ニ之解ニ上已准此ニ案云初二句八門是聞惠分斉唯假名句文ニ所得ニ之智惠故云観空ニ未知有ニ等ニ也第三句是思惠分斉兼縁義理ニ故得空有斉照ニ故云空有雙照等也倶舎頌疏第二十二云聞所成惠唯縁名境ニ未能捨文ニ而観義故思所成惠縁名及義ニ未全捨文ニ而観義ニ故修所成惠唯縁義境ニ已能捨文ニ而観義故上已准此應知又准解境行境惣有六句ニ者今初二句八門是初四句意也第三句是第五句意也第四句即當彼第六行境ニ應知

注□文

(20)

注既無百非文務本云百非者或從四句ニ歴法ニ累成或百是通擧大數上已又疏抄補解引筆削記ニ云百非者此於有無一異四句上ニ明之ニ謂有非有亦有亦非有非有非〻有為一四句ニ無等例此ニ共成十六ニ過現未來各有十六ニ成四十八ニ已起未起各四十八并根本四ニ都成百非也上已

(21)

注已當八部般若文大智度論疏巻第一惠影述云所無ニ八部者第一部十万偈即此経是第二部二万五千偈放光般若是第三部一万八千偈謂光讃般若是第四部八千偈道行般若是第五部四千偈小品般若是第六部二千五百偈天王問般若是第七部六百偈文殊般若是第八部三百偈金剛般若是若取其名同異同ニ故云八部ニ若談名異実同ニ者則大乘諸経無非皆是ニ就

名實同中仁王一部既是別為仁王説護國因縁是故不在八部之數已上又円測仁王経疏　巻明於八部有二種別要者可見之

(22)

注已當八部般若文

注無相大乗之極致也文起信注疏上云心意如門即頓教分斉始教中空義亦是察説此門已上准此始頓二教共是無相大乗也對始教之察説故指頓教為極致歟

注又乍観文相文玄鏡以三義尺之初約二諦三諦三観尺次約色空相望惣有中色不異空〻不異色等四句上尺後約色空相望惣有中相成無导相容　三義上尺今注但擧約　三諦三観尺上也問若尒今擧此尺即云細詳観文等者注家破玄鏡歟答玄鏡云雖有三観意明三観融通為眞空耳已上明知玄鏡亦乍観文相二往配合其實細詳所宗但為眞空也為言是即注家正依用玄鏡也務本記意

観若不洞明前解文務本云初云前解但是聞思修信解也此行者定也成其正解者従定發惠也解絶者聞思信解不存亦始覚合本之意矣已上上云聞思修信解之修字必可除之故下但云聞思信解也俱舎頌云等引善名修極能熏心故已上故知従定所發之惠名為修惠尒者信解但是散心聞思二惠故聞思修之修字必應是傳寫之誤也問解字一也何尺　前解之解云聞思信解尺　正解之解云従定發惠哉答一義云解了解悟並是智惠之相用也然若聞思所生之智惠唯依教解義或依義思想是即前解也若修定所生之智惠正断惑證理故云正解也例如円覚略抄二下八對修悟中云悟有解悟證悟已上何妨解亦有浅深哉又如云頓同佛解者豈可佛解唯依教解義哉玄鏡云行起解絶雖絶而現解行相融已上思之

一義云智燈疏尺若不洞等二句云初由解成行又尺若不解此行法等三句云二由行成解也○由解此行法絶於前解〻〻方成其正解也已上此指所絶之前解即名正解今注意亦同

(23)

今三四兩句正答彼□者次下注尺其大意云以非□□□為因務本尺彼注云以非等者難意云偏塵非小二義相違何得互通今第三句明理偏在一塵第四句明雖遍非小其無分限則非小也即雙答偏塵難非小及非小難　偏一塵上難雖兩段但一相偏故唯云偏塵非小之宗矣已上此全寫玄鏡也若不得此尺意者今三四兩句正答彼兩段問難之趣誰得弁之哉

観次事望理文自下答上一塵全市於理性等之問也玄鏡云亦初二句正明偏理非大之相初句一塵偏理第二句明其非大亦三四句正答相違之難亦第三句明一小塵偏於大理亦第四句雖偏於理而塵不大已上

観答以一理性融故文此惣標就理四句之因由也意云理与多塵一塵共非異不　妨全在多塵亦全在一塵者是併以一理性融故也問正見下就理四句並以非異為因由然今

何云尒哉答

観多事無閡故文此惣標就事四句之因由也問多事無导者准下四句是一塵市理時不导多事亦市　理等也尒者是即宗法而非因由 見タリ 何云標因哉答凡就事四句□今惣尺成理事相遍之旨故以一塵諸事共同全偏理為所成之宗然若一塵偏理与多事偏理□多各別□重〻□不可成同全偏理之宗今既無导故不妨同全市　於理故

(24)

(注父)□子反上文務本云父子反上者若據前句注文父子喩□不見与此對敵之相若欲相反前合更云既各全為□則不导於全對九子為父亦全對一子為父今則反□既各全為父則不导於全對一子為父亦全對九子□入已上

(注前)□難外事有理文務本云前難等者此恐初心雜乱難□但通相指配問答大意玄鏡則隨問別對等文等

(注問所)□□無海波喩有文自下兩開之難全是玄鏡□也

(観一)□〻塵全市於理時文問自下四句如何會通上兩開之難答務本云玄鏡惣示答意云故今答云多事如理同句偏則無重〻何以(故)□理無二故但事同理無分限故

(25)

(注)□耳已上

□云文務本云今注文中有云〻二字者准理望事合云一塵与理非異故一塵全偏理性多塵亦与理非□故不妨多塵還偏於理性且約名字而言十子對□一〻全得其父也已上私云是即尺成上云一偏不导多偏之義也

(観一多)□□□之相歴然不壊文務本云正由諸法与理非一故各歴然□本相則性等者乃是約所偏理性与事非一故性非一○居然等者結帰本文已上意云由諸事与理性非一故諸事歴然不壊也非謂□□有一多也為言

(観三)□□依理成事門文自下二門相成對也問注云此有二因尒者皆無自性与由無性理何別哉答玄鏡云所以有二一由無性故二眞如隨□已上今注全寫此尺也准此案云皆無自性者□也無

(縁)

(26)

□縁也抄十上云若法相宗遍計依他唯約於事○今法□宗遍(性か)計理無依他無性即是於理已上正是此意也務本□□眞如隨縁一句獨明理無性義引於中論及大品經□□證事理俱無自性事無自性通於始教理無自性□□談已上此尺云事無自性通於始教者以兼通終教□□

(観如)□□波要因文問今明因中有法喩合三段尒者上法有二今喩者喩何因哉答玄鏡云喩有二義一上喩無性由水不守水自性故而能成波二下喩眞如隨縁成故謂若無水則無有波若無眞如依何法成已上問如此尺者上無自性亦似理無性如何答

注問明品云文玄鏡云故問明品文殊難云心性是一云何見有種〻差別覺首答云法性本無生示現而有生則是眞如隨縁答已上

観四□(事)能顕理門文案云今事理者事通妄心妄境ニ理通眞智眞□ニ
然准今注尺ニ妄滅分別之事ニ即表本覺靈知之理ニ是為事能顕
理ニ見タリ即就此顕理ニ可有二義ニ如起信疏□□無明中初違自
順他亦有二義ニ一能返對詮示性□□(ヵ)一能知名義成浄用已上初
義者顕本覺之理ニ也彼論弁所示□□示相大ニ云具有過恒沙
等妄染之義ニ對此義ニ故□□□ニ則有過恒沙等諸浄功德相義
示現已上即此□□義者成始覺之智也彼論説根本不覺ニ中云
以有不覺妄想心故□□為説眞覺等文疏云依迷顕覺○明妄有
起

(27)

時必与一切衆生同躰俱成又云成与不成無二性者正由不取
新成之虚相也已上花嚴宗説等者大疏九上尺也又故花嚴説等者
是出現成正覚中云如來成正覚時於其身中普見一切衆生成正
覚等文
観六事能隠理門文注云由第三等者務本云以下全理ニ成事ニ〻有
形相ニ理無中形相ニ故事違理ニ然此事法既違於理ニ故隠也已上
注亦云市文是有本也但玄鏡智燈所撰本並云違ニ也通玄云注云
市者取隠覆義已上
注問明品亦云文是財首偈也上半偈云世間所言論一切是分別已上
大疏三上云依言論時ニ令尋思名等ニ入如實観ニ謂了名等唯意
言分別ニ無別名等ニ○既隨分別ニ則妄計意流尚未了唯心ニ安
入法性ニ○上約心乖ニ躰非不　即ニ又不入者妄想躰虚無可
入ニ故已上務本ニ引此疏文ニ即尺云據清涼意ニ約於心乖ニ不入法性ニ
正与今文引證ニ相應又不入等　者乃是餘義　而演義第七尺於
此門ニ同今引證ニ止用後義ニ者未敢詳定已上
観七眞理即事門文自下二門相即對也問前五六実与此七八相
即ニ有何別ニ哉答玄鏡云前明隠奪ニ事隠　於理ニ而理不亡ニ理
奪　於事ニ而事猶存雖言奪事ニ皆盡ニ而意在彼事相虚非無　彼
事ニ也今明相即ニ廃已ニ同他ニ□(唯)ニ耳已上

(28)

観以是法無我理故文此有二因ニ一於因縁所生□諸法上ニ自備無
性義ニ即是無我理　故此無我理定非事外ニ也二事依理ニ立以
能依所依是不離ニ故離事躰ニ外　而理無自躰ニ故眞□(理か)非事外ニ
也此約不離歟務本但虚無躰故者玄鏡云理虚無躰全將事法本

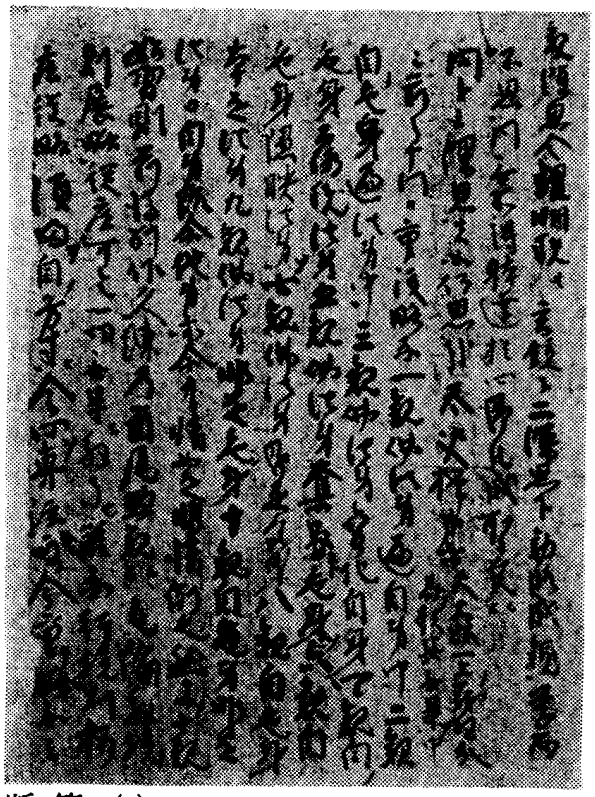
(29)

来虚寂ニ為眞理ニ耳已上唯識頌云円成實於彼常遠離前性已上彼□
指依他ニ也
□(注)若但是空文問如此注尺ニ者全不見二因分別ニ尓者上以二因ニ
分尺　観門ニ恐　違注意ニ歟答
観九眞理非事門文自下二門相非對也玄鏡云即雙存義若不雙
存ニ無可相成相即隠奪等ニ此門則隨縁非有之法身不異事ニ而
顕現後門寂滅非無之衆生恒不異眞ニ而成立
注但文小異尓文務本云合眞妄虚實ニ為性相故已上
観十事法非理門文注云七八等ニ者玄鏡云此第十門事望於理但

有二對○若依此對二諦時立即於諦常自二一七八即於解常自一五六則二而不二三四則不二而二由初一對一則令前義皆得相成已上問如此尺者通指示十門今何唯別挙後四門哉答務本云惣以後之四門融二諦無尋也已上

注於解常一文円覚略抄一下云第一義諦有二尺二雙融明中○仁王云於諦常自二眞俗於解常自一眞即俗俗即眞通達此無二眞入第一義故昔人云二諦並非雙恒乖未曾各二雙泯顕中謂非眞非俗但是心靈已上行願記第一云仁王經云於解常自一是遣二也於諦常自二是遣一也又二諦並等文同前問

注眞空四義○妙有四義文玄鏡云約理望事有眞空四義○約事望理有妙有四義等文



断簡 (30)

注即成即壊等文務本云即成等者

□(注)又事無躰文観約理望事下注有三上来尺諸門義相一今又事下二別尺成壊隠顕二不會下三尺不會初二所以務本意

(30)

観深思令観明現文玄鏡云二深思下勧修成観学而不思同無所得躰達於心即凡成聖矣已上

通玄云深思下勧修也將上十門法義依明師禀受無令差誤即聞惠成也將此文義反照自心故云深思即思惠成也令観智分明顕現即修惠成也從聞思修入観智故惣結云是謂理事円滿□(融通)□無尋観也已上

問今云深思者如何思哉答決擇第六尺大疏一上義理分斉彰其無尋中自色身遍法身中三観佛法身変化自身四観自色身露現法身五観佛法身奪盡色身六観自色身隠映法身七観佛法身即是色身八観自色身本是法身九観佛法身非是色身十観自色身非是法身○自身既尒他身亦尒有情如是非情例之然上十観始習則前後別作久練乃首尾惣観已上凡論解境則展略從廣可令一切無尋解了若示行境則攝廣從略須帰自方寸令心專注是故今重略示云

(31)

故即含容義理亦如空具於二義無不遍故無不包故即事如理乃至纎塵亦能包遍故云事如理融遍攝無尋攝即含容義已上

今注□全同之如此尺者先約喩即取虚空遍容之二義以立

名ヲ次約此虚空之二義ニ以顕下理ニ亦具中遍容之二義ヲ上是レ即因也後約此眞理之二義ニ終成下事ニ即具遍攝ヲ之義ヲ上是レ即宗也故知雙約法喩ニ亦通ノ宗因ニ以立此名ヲ者也問周遍含容者直約ノ能観之智ニ以立観名歟為當約所観之境ニ立能観名ヲ歟答務本云注事〻無导也者　即以周遍含容観ヲ〻事〻無导法界ヲ也然其ノ周遍含容亦目所観ニ但順方便ニ使人易了以□其名ノ故演義云

（大正大蔵経の頁・段・行）

(1) 六八五・下・一七
(2) 六八五・下・一八―二九
(3) 六八六・上・一―三
(4) 六八六・上・二七
(5) 六八六・中・二―七
(6) 六八六・中・一三
(7) 六八六・中・一三
(8) 六八六・中・一六―二〇
(9) 六八六・中・二一
(10) 六八六・中・二一附近か
(11) 六八六・中・二一附近か
(12) 六八六・中・二五
(13) 六八六・中・二五
(14) 六八六・中・二八―下・五
(15) 六八六・下・九―一五
(16) 六八六・下・二二―二六

（断簡の所在）

古文書八〇〇号紙背
戒本見聞集五三
古文書二三四三号紙背
古文書三三〇七号紙背
古文書九八〇号紙背
古文書三三三四号紙背
戒本見聞集五二
花厳見聞集九
花厳見聞集一二
花厳見聞集一二
花厳見聞集一二
古文書三七六一号紙背
古文書三三二三号紙背
花厳見聞集九
花厳見聞集一二
花厳見聞集九

(17) 六八六・下・二七
(18) 六八七・上・三
(19) 六八七・上・九―一二
(20) 六八七・上・一七
(21) 六八七・上・一七
(22) 六八七・上・一七―二八
(23) 六八八・中・三―一八
(24) 六八八・中・二八―下・一六
(25) 六八八・下・一八―六八九・上・三
(26) 六八九・上・一一―一六
(27) 六八九・中・一―七
(28) 六八九・中・九
(29) 六八九・中・九―下・一七
(30) 六八九・下・二二
(31) 六八九・下・二四附近か

古文書一九六〇号紙背
花厳見聞集九
花厳見聞集九
花厳見聞集一二
戒本見聞集五三
古文書三三九三号紙背
古文書三五七三号紙背
古文書四六四五号紙背
古文書五九三〇号紙背
古文書三三〇九号紙背
花厳見聞集九
戒本見聞集五二
古文書九三七号紙背
戒本見聞集五三
古文書一八四七号紙背

（追記）

断簡(30)の三行目「通玄云」から六行目の「無导観也上已」までは紙背にある。写真では二行目の「不」と三行目の「問」との間に○印があり、上方に線が引いてあるが、これは紙背に続く意味の印である。